OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	弥生・古墳時代農耕社会と集団関係の考古学的研究
Author(s)	大庭, 重信
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55694
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　大庭重信　）	
論文題名	弥生・古墳時代農耕社会と集団関係の考古学的研究

論文内容の要旨

本論文では、弥生・古墳時代の集団関係とその変化を、水稲農耕の灌漑システムの変遷を軸に、畠作や馬飼育などの他の生業活動や、集落の形態、墓制などを通じて明らかにする。序章では、これまでの研究を整理して課題を設定したのち、本論を二部構成に分け、第Ⅰ部（第１章～６章）では弥生・古墳時代の農耕を、第Ⅱ部（第１章～４章）では弥生時代の方形周溝墓制と葬送儀礼・祭祀をとりあげる。そして、最後に終章を設け、各章で述べてきたことを横断的にとりあげ、弥生・古墳時代の集団関係の変遷を復元する。以下、本論の内容を章ごとに要約する。

第Ⅰ部「弥生・古墳時代の農耕と集団」（第１章～第６章）

第１章では、水稲農耕定着期の日本列島と韓半島南部の水田稲作・畠作を生業戦略の視点から比較する。まず、韓半島南部の青銅器時代後期では、水田稲作・畠作のどちらかに比重を置きつつ、耕地を移動しつつ共通した土地利用を行っていた。これに対し、西日本の弥生時代前期には、縄文時代以来の網羅的な生業体系に小規模な水田稲作・畠作を取り込む類型と、水利協業の必要からそれまでの生業体系を大きく変えて水田稲作に特化する類型があり、後者がその後の弥生・古墳時代の社会的再生産の基盤となった、と整理した。

第２章では、河内平野南部を対象に、ジオアーケオロジーの手法を用いて弥生時代の古地形と集落景観を復元し、居住域・墓域・生産域の配置と地形発達に伴うその変遷を明らかにした。また、各時期の可耕地と実際に水田域として利用された面積を試算し、土地利用率の変化を数量的に把握した。その結果、弥生時代を通じて農業生産力は増加したが、単純な右肩上がりではなく時期によって変動があり、それが集落景観とも密接に関連することを示した。

第３・４章では、西日本の弥生時代水田を取り上げ、水利系統と水回りの単位を復元し、その空間構成を水田ブロック・灌漑ユニット・水田ゾーンに分け、弥生時代を通じてこれらの関係が重層化していくことを明らかにした。そして、農業水利学で定義されている灌漑システムの概念を導入し、考古学から明らかにしうる施設システムの変遷から、社会システム、すなわち水田経営における集団組織や協業単位の変化と追及した。その結果、弥生・古墳時代を通じて普遍的に認められる水利の基本単位である水田ブロックは、その規模が時期を通じてほぼ一律であることから、これを一つの世帯によって経営された田圃であると考えた。そして、これより上位の水利協業単位は時期によって結合度が異なり、弥生時代前期は水利を異にする個別の水田ブロックが集合する形態で（Ⅰ類水田）、弥生時代中期には日常的な利害関係を共有する灌漑ユニットを単位に水田経営が行われ（Ⅱ類水田）、弥生時代後期に水田ゾーン全体の水利調整・協業が必要な水田形態が出現した（Ⅲ類水田）。

第５章では、古墳時代の水田遺構を対象に同様の検討を行い、近畿地方では弥生時代後期に成立したⅢ類水田の灌漑システムを基本としつつ、５世紀後半にこれらが複数の水系にまたがり集合・大規模化するという画期を認めた。また、テフラで覆われ遺存状態が良好な水田が多く調査されている東日本の群馬県域を取り上げ、極小区画水田と単線水路を特徴とし、灌漑ユニット（群）が繁忙期である田植え作業時の重要な協業単位となる、西日本とは異なる灌漑システムを５・６世紀に採用していたことを明らかにした（Ⅳ類水田）。また、６世紀前半の子持山南麓の集落の分析から、こうした灌漑ユニット（群）が複数の世帯共同体を含む小集落によって経営されたことを示した。古墳時代の農業生産の画期は、西日本同様、東日本でも５世紀後半に起こっており、古代の郷につながるような地域社会の中で、居住域と生産域の分離とそれに伴う社会分業化が進行していたと考えられる。また、西日本では広域での水利統制を行う首長の役割が高まり、東日本でも実際の水利統制を行わないまでも、これを支配原理に取り込もうとした首長の姿を認めた。

第６章では、集落から出土する穀物種子遺体を素材とし、河内の生駒西麓地域で５世紀後半に小麦栽培が急速に普及したことを明らかにした。そして、その背後に韓半島西南部から導入された馬飼育に伴う土地利用システムの変化や地域複合体の変化を想定し、第５章で指摘した５世紀後半の地域社会の分業化を、畠作や馬飼育といった別の生業活動からも指摘した。

第Ⅱ部「弥生時代方形周溝墓制と祭祀」（第１章～第４章）

第１章では、近畿地方の方形周溝墓から弥生時代の階層性とその変化を論じた。墳丘区画の規模・埋葬施設の配置・副葬や赤色顔料の使用などの属性から、中期中葉に上位階層墓と呼べる墓が出現し、中期後葉には共同墓地から独立した上位階層墓がみられ、大型の集落内では増墓集団を単位に一定の階層秩序が形成されていることを明らかにした。また、後期前半には方形周溝墓が激減し、被葬者が上位階層者に限定され、後期後半には単数埋葬を主体とした方形周溝墓が新たに出現するという変化を指摘した。

第２章では、弥生時代中期前半から後期前半にかけての複数埋葬の方形周溝墓について、年齢構成や埋葬順序、埋葬施設の配置などから、その埋葬原理を抽出した。そして、多数埋葬の方形周溝墓の被葬者の関係について、複数世代にまたがるものではなく、同一世代の集団構成員が埋葬されたものであることを示した。また、共同墓地の分析から、出自集団や親族集団とされるような造墓集団が墓群を形成し、中期後半から後期前半にかけてこの中で被葬者が絞り込まれていったと考えた。

第３章では、弥生時代の葬送儀礼をとりあげ、方形周溝墓から出土する土器の器種構成や使用痕跡、木製品の種別用途から、個々の埋葬に伴って行われる葬送儀礼の過程を復元した。また、土器の出土状況の詳細な分析を通じて、方形周溝墓への複数の被葬者の埋葬過程と、儀礼痕跡との関係を検討した。その結果、近畿地方では弥生時代中期中・後葉に葬送儀礼の場で飲食物を伴う儀礼が盛行し、方形周溝墓に複数人数が埋葬される場合、墳丘築造時の初葬段階が重要視され、そこで様々な儀礼が行われていたことを明らかにした。

第４章では、前章で言及した個々の埋葬に伴う葬送儀礼とは異なる、墓地を対象とした共同祭祀が弥生時代中期中・後葉に行われていたことを、いくつかの資料から論証した。こうした共同祭祀は多数の土器を用いることを特徴とし、多くの人間が墓地の近くで共同飲食を行うことを通じて、造墓集団の紐帯・帰属を再確認するような社会的役割を果たしていたと推測した。

終章

以上の検討を踏まえ、最後に弥生時代の「灌漑システムからみた農業経営と社会の変化」、「階層分化と首長」、および「古墳時代の農業経営の変革」の３点について論じた。河内平野を例に挙げると、弥生時代の灌漑システムの変化は集落や墓制の変化に先行して起こっており、以下のような変化の因果関係が考えられる。弥生時代前期から中期にかけての灌漑ユニットの形成とこれを単位とした水利協業の強化は、墓の場でも方形周溝墓の複数埋葬化や共同墓地を分割する造墓集団の形成といった集団化を志向する契機となり、葬送儀礼や共同祭祀もこのような紐帯維持の役割を果たしていたと考えられる。集住化した中期の大型集落には、こうした生産や造墓活動を行う集団が複数存在しており、階層分化の進行により集落を代表する首長層も存在したが、灌漑システム全体を統括する役割はなく、危機管理者としての存在にとどまっていたとみられる。続く弥生時代後期前半には、階層分化が進展するとともに首長権も伸長し、灌漑システム全体を統括する指導者を必要としたⅢ類水田が出現し、生産量の増加や個々の世帯の安定化が図られた。こうした社会組織の整備の結果として、後期後半に単数埋葬の方形周溝墓の出現や集落の小規模分散化という変化が起こり、耕地経営を結合原理とした新たな集落景観が出現する。また、弥生時代後期に進んだ農具の鉄器化も、灌漑システムの変化によりその需要が増したことに起因し、これを獲得するための物資流通ルートを首長層が掌握することで、首長権の伸長と地域を超えた政治的関係の形成が加速化したとみることができる。

古墳時代もこうした弥生時代後期の変化の延長上にあり、そのなかで５世紀後半に農業生産と経営上の画期が認められる。これは従来考えられてきたような労働力を結集して大規模な人工水路を掘削し、首長主導で未開地を開発した結果達成されたのではなく、それまで地形単位ごとに完結していた水田経営から、より広い領域を対象とした効率的な生産域の配置が首長主導で進められ、それに伴い地域社会内での分業が進展したと考えられる。こうした考古学によって実証レベルで明らかにしうる変化は、大きな共同体から独立した経営体が生まれてくる過程を重視したマルクス主義歴史学の見方とは異なり、水利を共有するまとまりが時期を経るにつれ重層化しつつ規模を拡大させ、それに伴い水利の統制力が強化されていく過程ととらえることができる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　大庭重信　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　福永伸哉 副 査　大阪大学　教授　高橋照彦 副 査　大阪大学　准教授　市　大樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　弥生・古墳時代農耕社会と集団関係の考古学的研究

学位申請者　大庭重信

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　福永伸哉

副査　大阪大学教授　高橋照彦

副査　大阪大学准教授　市　大樹

【論文内容の要旨】

本論文は、日本列島において農耕が開始された弥生時代から巨大な前方後円墳が登場する古墳時代に至る社会の変化を、水田遺跡の灌漑システムから見た協業実態の検討と、墓制や集落の分析を総合することによって体系的に解明し、そのあり方から日本古代国家形成過程の特質を展望したものである。全体は2部10章からなる本論に序章と終章を加えて構成されており、分量は400字詰原稿用紙換算509枚、図表105点である。

研究史の整理と研究の目的を示した序章に続いて、第Ⅰ部第１章では、弥生前期の農耕定着期に、畠作を含む多様な生業形態の中から水田稲作に特化する生業形態が選択され、その後の弥生・古墳時代の社会的再生産の基盤になっていくという見通しを示した。

第２章～第６章にかけては、ジオアーケオロジーの手法による遺跡の微地形復元と農業水利学の「灌漑システム」概念に基づいて、考古学から明らかにしうる水田給水方式の変遷を提示するとともに、水田経営における集団組織や協業単位の変化を論じる。

第２章では大庭氏が長年の調査フィールドとする河内平野南部の状況を詳細に分析し、さらに第３章、第４章では西日本エリアを対象として水田遺跡の灌漑システムを検討した。その結果、水源から単線水路で直接個々の「水田ブロック」に給水するⅠ類、水源から規模の大きな幹線水路で導いた水を複数箇所から取水して、複数の水田ブロックで構成される「灌漑ユニット」に給水するⅡ類、幹線水路をさらに分岐させて複数の灌漑ユニットからなる「水田ゾーン」に給水するⅢ類の３タイプを見いだし、それぞれが弥生前期、中期、後期の先進的な水田のあり方に対応するとの変遷を提示した。第５章、第６章では、分析対象を古墳時代にも広げ、５世紀後半の近畿地方において、Ⅲ類水田が集合化、大規模化するという大きな画期を見いだすとともに、東日本では単線水路から複数の「灌漑ユニット」に直接水を流すいま一つの灌漑システム（Ⅳ類）が発達することも指摘した。

第Ⅱ部では、近畿地方の方形周溝墓をおもな対象として、そうした水田経営を担った人々の集団構造や集団関係を分析する。第１章では墳丘規模・埋葬施設の配置・副葬や赤色顔料の使用状況、第２章では被葬者の年齢構成や埋葬順序、第３章、第４章では墳墓出土土器の器種構成や使用痕跡などをそれぞれ分析し、親族集団を基礎として形成された方形周溝墓群の中から、弥生中期中葉～後葉にかけて上位階層が顕在化し、後期には被葬者が上位階層に限定されていくという階層秩序の進展が認められることを指摘した。

以上の考察を総括した終章では、灌漑システムのタイプは水田経営にかかわる集団の規模の違いを反映しており、世帯レベルに対応するⅠ類から世帯共同体レベルに対応するⅡ類を経て農業共同体レベルに対応するⅢ類に至る変遷が、弥生時代の方形周溝墓制の展開からうかがえる集団規模の拡大や階層化の進展と対応関係にあると結論づけた。また、古墳中期におけるⅢ類の大規模化は、灌漑水利の管理を通じた王権の発達と関連づけて理解できると主張した。そして、水田経営と集団関係のこのようなあり方は、水稲農耕開始時点からすでに存在していた自律的な小経営が、灌漑水利などの必要性から相互の連携を強めることで大規模な農業共同体へと発展していくと見た、都出比呂志氏の日本古代国家形成論と整合的であるとの展望を示した。

【論文審査の結果の要旨】

日本列島において国家形成の動きが急速に進展する弥生時代、古墳時代。この一千年間に社会がどのような過程を経て変化したのかという問題は、多くの議論が集中する日本考古学の主要な研究テーマの一つである。しかし、従来の分析対象は圧倒的に墳墓遺跡や集落遺跡に偏っており、生業の中心を占める水田遺跡からのアプローチは、きわめて不十分な状況にあった。

本論文でまず特筆される点は、遺跡の層位学・堆積学的検討をふまえた精密な古地形復元と、流路・堰・水田畦畔・墳墓・住居址などの遺構分析を総合して、灌漑システムの観点から、水田経営の実態とそれにかかわる集団関係の変遷を明らかにする独創的、かつ体系的なアプローチを開拓したことである。河内平野南部の低湿地遺跡を対象とした詳細なケーススタディとして提示した分析は、考古学における新しい遺跡研究方法として高く評価される。

この方法に基づいて、Ⅰ類水田は水利を異にする水田ブロックを個別に経営する形態、Ⅱ類水田は日常的な利害関係を共有する灌漑ユニットを単位に経営を行う形態、Ⅲ類水田は水田ゾーン全体の水利調整・協業が必要な形態と把握し、それらを弥生時代の集団関係の発展と連動させて評価した点は、これまでの弥生社会研究を大きく前進させる成果といえる。また、灌漑システムの面から古墳時代の王権や首長権の増大を展望した点も、今後多くの議論を巻き起こすであろう刺激的な提言といえる。

もちろん本論文にも再検討や改善を要する部分は残る。水田遺跡の包括的な分析に比べると墳墓や集落の分析が時代的、地域的に偏っており、水田との比較対照にややバランスを欠いていることや、国家形成過程の研究における共同体論の理論的理解に不明確な部分が残ることなどは、そのいくつかの例である。

とはいえ、これまで著しく立ち後れていた水田遺跡の分析を主軸に据えて弥生・古墳時代の社会変化を解明するアプローチを実証的に提示した独創性と、そこから国家形成論研究まで展望したスケールの大きさは、従来の研究の到達点を大きく越えるものとして高く評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。